



ティー・ブレイク

NO.74

宝 探 し

都会で暮らすためには、面積を有効活用しなければならず、季節の変わり目には、必要に迫られて、片付けを行うことになる。

そうして片付けを行っているとき、思いもかけないときに、思いもかけない物が偶然に見つかる。そういった現象は洋の東西を問わずに見られるようで、これを英語では、セイロン（現在のスリランカ）の名にちなんでセレンディピティと言うらしいが、意外な物が見つかったときには、不思議な嬉しさが伴うものである。

ただ、このセレンディピティは、年末のそれとは比較にならないにしても、片付けの作業を中断させるものでもあるので、いかにしてその「嬉しさ」を噛み締めずに事務的に作業を進行させていくかということが、作業の効率を上げるキーとなる。そうして、片付けの最後にはクリーニングに出す前に、スーツのポケットの中に入っているものを取り出す作業に入る。

そう言えば、季節の変わり目に、クリーニングに出す父親の背広のポケットを、母と一緒にまさぐったものである。そして、父親の背広のポケットからたまに出てくる小銭を見つけては、母とともに喜びの歓声を上げた。

この季節の変わり目の「宝探し」が始まったのがいつなのかは思い出せない。ただ、ひたすらに母親と一緒にいるのが楽しいという時期を過ぎ、人並みに反抗期を経て、いつのまにか「宝探し」はしなくなった。

そうして、母のエプロンの刺繍がぼやけた状態でようやく思い出せる今となっては、記憶もかなり遠くなってしまっており、そのことについては殆ど忘れかけていたのではあるが、ふと出てきた母子の写真に懐かしさが触発され、母亡き後に父の身の回りの世話をしている妹に、父の背広のポケットから発見されるであろう小銭のことを尋ねてみたのである。すると、「そんなことはない」と言う。

瞬時に、「そんなバカな」とは思ったが、よくよく考えてみれば、お金については非常に几帳面な商売人である父が、ポケットの中に小銭を残したままにしておくことなど、ありえない。また、父に聞いてみると、私が幼少の頃は、実家が貧しかったがゆえに、余計な小銭をポケットに入れたままにしておくことなど、考えられないことであったという。

それを聞いたときに、今の金銭感覚からすれば到底信じられないことではあるが、当時の我が家では10円や20円の小銭でも貴重なものであり、それはそれで大変な時代であったのだなあとしみじみと思ったのと同時に、そんな中であって、特にお金に厳正な父の目を盗んで私のために母がしたのであろうそのカラクリが分かり、多少の拍子抜けもしたのではあるが、ただこれが発明であったなら確実に進歩性は無いだろうなとそう思ったその瞬間に、幼い私を嬉しそうに抱いている写真の母の姿が急ににじんで見えてきたのである。

（正）